
白獅王戦記譚

鷹崎篤実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白獅王戰記譚

【Nコード】

N8243W

【作者名】

鷹崎篤実

【あらすじ】

交通事故に遭い、異世界『白獅王大陸』の天才術者ウェイン・カルシュタッドに憑依してしまった主人公。

人が術を普通に使える世界で、唯一魔力を持たず術を使えない主人公は知恵とハツタリと運よく契約できた神劍『レーヴァテイン』を駆使して、王への道を突き進む！

ウェイン・カルシュタッド（前書き）

学生時代に書こうとして頓挫した小説ですが、発掘したのでいまさら書きなおしてみました。皆さんの暇つぶしになりますように。

ウェイン・カルシュタッド

『どうやらオレは死んじまったらしい』

間抜けな話だが、それに気付いたのは実際に死んでしまつて、だ
いぶ経つてからのことだったんだがね。

「――いや、しかし、やれやれだな」

というわけで辺り真つ暗な中、頭をかきかき、つぶやくしかない
オレ。

「えーっと、何でこんなことになったんだっけ？」

ため息まじりに状況確認してみるも、周りにはたずねるべき人影
すらないわけで。

いや、それどころか、見渡すかぎり真つ暗で何もないという状況。
無明荒野の真つ暗闇の中に、オレは一人、突っ立っていたのだっ
た。

果てさて、いくらオレがアウトロー街道をまっしぐらに突っ走る
ニヒリストとはいえ、こんな訳のわからないところに放り込まれる
ようなことを仕出かした覚えはないんだが、

一体、何が起こったんだっけ？

「――確か、学校の帰りに鯛焼き買って歩きながら食べてたら……」
あー、なんか思い出してきたぞ。

鯛焼きにかぶりつきながら信号を渡っていると、重大な事件が起
こったのである。

「中に入ってたのが、クリームじゃなくて粒餡だったんだ！」

オレは確かにクリームを頼んだはずなのに、店主の親父が間違え
やがったのである。

それで頭に来たオレは渡ってきた信号を引き返そうとして、

「飛び出してきた車に撥ねられて死んじやったんだよな。」

なんてこったい。こいつは笑うしかねえぜ。

あはははははは……って、笑ってる場合かよ！」

カッコ悪っ！

カッコ悪すぎるぞオレ。

「せめてそこは車に轢かれそうになった子供を助けて事故死じゃないのかよ!？」

鯛焼き片手に信号無視して事故死なんて間抜けすぎにも程がある！
童貞なうえにまだキスもしたことないのに死ぬなんて嫌だあ！」

それから数分間、色々とわめきながら、ひとしきり自己嫌悪に浸っている、ようやく混乱していた頭も収まってきた。

どうやらオレはマジで死んでしまったらしい。

ということは、ここでもうやって騒いでいても仕方ない。

『これからどうするか』という問題に取り組むほうが賢い選択だろう。

ポジティブシンキングってやつだ。

「——というわけで、さて、どうしますかね？」

見渡すかぎり一面真っ暗で地面すら存在しているかもわからず、風の流れさえも感じられないこの空間では、まず取り組むべき問題自体が見当たらないんだが？

幽遊白書みたき霊界案内人が都合よく現れてくれるとも思えないし、大体、死んだら人間ってのは三途の川に行くんじゃないのかよ？
脳内で色々文句を言っていたのだが、それもすぐに飽きた。

「まあ、文句言っても仕方ない。とりあえず寝よう」

やることがない以上、焦っていても仕方がない。

そういうわけでオレは寝ることにした。

人間、ときには諦めて流れに身をゆだねることも大事なのである。
よく言うだろ？

明日は明日の風が吹くってね。

まあ、そんな感じで寝たり起きたりを繰り返して、三日ほど経とうとしていた。

いや、実際には腹も空かないから、本当はもっと日にちが経ってたかもしれないし、実際には三時間くらいの話だったかもしれないけど。

で、だ。

さすがのオレも限界を迎えようとしていた。

何もない真っ暗な中にたったひとりで三日間だぜ？

チリの鉱山の落盤事件も相当なものだったらしいけど、オレだって死んでから三日も放置プレイを喰らってるんだから、何か変化くらいあってもいいだろうよ？

たとえば、可愛い女の子が空から降ってくるとか。

可愛い女の子がメイドとして仕えてくれるとか。

いや、この際、可愛ければ男の娘でもいい！

なのに、何の変化もなし。

これが死んだ人間の末路だって言うのなら、あまりにも残酷である。

「神さまのくそつたれがあああつあ！」

はち切れんばかりの音量で怒鳴り散らすも、やはり変化なし。

「——もう可愛い女の子じゃなくて、むさいおっさんでも、死にかけたジジイでもいいから現れてくれ」

精神的に疲れ果てたせいか、自分でも弱っているのがありありとわかるほど、とんでもなく譲歩した台詞をつぶやくオレ。

もちろん、こんな台詞で何か劇的な変化が起きてくれるなんて、露ほども期待していなかったんだけど。

しかし、次の瞬間だった。

ピカーンと突然、赤い光が見えたかと思うと、

『まだ生きたいか？』

いきなり現れたソレが藪から棒に訊ねてきたのだった。

「え？」

あまりに唐突過ぎる出来事に反応が遅れるオレ。

『望むのなら——お主に今一度生きる機会を与えよう』

こちらがどんなに困惑しているのが興味などないのだろう。

機械的にソレは告げてくる。

後で考えると、その声は老人のようにも若い女のようにも聞こえる不思議な響きを伴っていたんだが、このときのオレはただただ呆気にとられていた。

「生きる機会？」

『このままこの場所で朽ちるつもりか？』

抑揚のない声でソレは言う。

——この何もない場所で人知れず孤独に朽ちるつもりか、と。

いや、確認されるまでもなく、それだけは死んでもごめんな選択肢なんだが。

死んじまったオレが言うのも、おかしな話なんだけだよ。

『ならば、我を掴め』

命令とも催促とも違う機械的な口調でソレは言い捨ててくる。

さて、どうしたものかね？

正直な話、この状況では従う以外に方法などあろうはずもない。いかに相手が意味不明で正体不明で、とんでもなく嫌な予感がしようとも、だ。

というか、ぶっちゃけると何日間も真っ暗闇の中で孤独を味わってきたせいか、目の前のソレがたとえラクス・クラインとかデュラントル議長の手先であろうと、手を伸ばす以外の選択肢など、今のオレに思い浮かぶはずがなかった。

「はあ、どうしてこう面倒事にばかり巻き込まれるんだろうね」
つぶやきつつ諦観とともにオレは手を伸ばし、

その『赤い剣』を掴んだ。

次の瞬間、

『我が名はレーヴァテイン。汝を我が主として受け入れよう。』

ようこそ我が世界へ』

歓喜の声とともに世界が暗転した。

白獅王大陸　トマニア王国　カルシュタッド東候領　レミリア大
聖堂

さて『ようこそ我が世界へ』などと言われて、『やった。これでくそったれな暗闇ともお別れだぜ』などと喜んでいたのも束の間、視界が暗転したと思った瞬間、ひたいに激痛が走り、オレは刻の涙を見た。

「——つつう、一体なんだってんだ？」

つぶやきつつ、ひたいへと手を当てる。

どうやら床に思いつきりぶつけたらしい。

ひりひりと痛い。これは絶対に擦り剥いてるぜ。

「——って、床？」

反射的に目を開けると、そこには確かに石畳の床。

つ、ついにあの真っ暗な空間から脱出できたんだ！

うれしさのあまり顔を上げて周りを見渡すと、

「——兄上様！　大丈夫ですか！？」

駆け寄ってくる見知らぬ西洋人の女の子の姿が！

「え？　え？」

あまりの事態に疑問符を浮かべるオレに向かって、躊躇なく抱きついてくる女の子。

ええええ！　何だこの役得シチュエーション！？

や、柔らかい。それに、女の子のいい匂いだ。

とりあえず状況はよく掴めていないが、まずは女の子の感触を堪能することにしよう。

うっほーい、あのくそったれな空間から脱出できた上に、こんな

可愛い子の抱擁まで受けられるなんて世の中捨てたもんじゃねえぜ……なんて喜んでる場合じゃないよな。

つい先ほど散々な経験をしてきたばかりのせいか、女の子の感触を堪能しつつも嫌に冷静なオレがいた。ああ、それにしても柔っこくて可愛い子だ。

女の子に抱き付かれたまま辺りを見回せば、女の子の他にも多数の西洋人たちの姿。

そいつらの背後にはステンドグラスらしき物も見え、オレが座っている床も石畳ということから察するに、ここはおそらく聖堂かなんだろう。

こんなに大勢集まってミサでもやってたんだろうか？

まったくご苦労なことである、なんて感心してる場合じゃないよな。

今さらな話だが、どうやらここは日本ではなさそうだった。

まずいな。オレ、日本語以外話せないんだけど。

しかも今現在、オレを取り囲んでいる問題はそれだけではないのだ。

先ほどの西洋人たち。

その誰もがオレの方を驚いたような目で見ていたのである。

まあ、そりゃ何もないところから、見知らぬ人間がいきなり現れれば、びっくりだろうけど。

自分で自分を納得させつつ、抱きついてきている女の子を引き離しにかかるオレ。

この感触は名残惜しいが、さすがのオレも衆人環視の前で初対面の女の子と乳繰り合えるほど図太くない。

このままじゃ不審者として警察に突き出されてしまう可能性大だし、最悪、セクハラの現行犯としても逮捕されかねなかった。

「あー、きみ、オレはきみのお兄さんじゃない。日本語、わかる？ キャンユースピークジャパニーズ？」

「……兄上様、やっぱりどこかお怪我を！？」

怪訝な顔をしつつも未だオレのことを兄呼ばわりする女の子。

「いや、だからオレはきみの兄貴じゃないって――」

誤解を解くべく口を開いたオレだったんだが、

「……あれ、おかしいな」

一言二言もしやべらないうちに身体から力が抜けてきて、その場に倒れ込んでいた。

ちよっ、何だよこれ！？

急に身体が動かなくなるなんておかしいですよ、カテジナさん！
そうこうしているうちに意識までも遠くなってきた。

マジでヤクイ。

「兄上様、兄上様あ！」

泣き出しそうな女の子の声と、

「な、何ということだ！ レーヴァテイン継承の儀は中止だ。早く
治癒師と医師を呼べ！」

「――まさかウェイン様が継承の儀を失敗なさるなんて」

「――カルシュタッド家はどうなるんだ！」

それに続くように怒号と、どよめき声上がるのも聞こえてきた
んだが、正直オレにはどうしようもなかった。

ただ――本当に意識を失う寸前、あの赤い剣レーヴァテインがオ
レを見下ろすように床に突き立っているのが見えた気がした。

カルシュタッド東候領レミリア 侯爵邸

どれほど眠っていたのだろうか、オレが目を覚ますとあの倒れそ
うなほどの虚脱感は消え去っていた。

まさしくオレ全快ってやつである。

「――ふあーあ、よく寝た」

そういうわけで伸びをしつつ目を開けてみたオレだったんだが、
視界に映ったのは見慣れた自分の部屋の天井ではなく、

「うわー、どこだよ、ここ？」

としか反応しようがない、小型のシャンデリアが天井から垂れさがっているような、まったく見知らぬ異空間だった。

ついでに部屋を見渡せば、高価そうな調度品がちらほら目に付いたし、何よりオレ自身が眠っているベッドも高そうなアンティーク物だった。

「おいおい、何だよ、この部屋は？」

これって何かのドッキリか？」

自分で言うっておきながら、今どき、素人参加のドッキリ番組なんて流行らないことを思い出すオレ。

じゃあ、どういうことだ？

少し考えてみたが、まずい。まったく状況が掴めない。

掴めないが掴めないなりにオレは考察するしかなかった。

落ち着け。落ち着いて結論を導き出すんだ。

かつて町内で神童と謳われた黄金の頭脳をフル回転させろ。

「……これはおそらく、オレのイケメンっぷりに目を付けた海外の富豪の未亡人に誘拐されたものと考えるのが妥当だ」

フェイトでイリヤにアインツベルン城に誘拐されたときの衛宮士郎みたいなもんか。

ただ一つ、えみさんとオレが状況的にまったく違うところがあるとすれば、

それは――オレには助けに来てくれる可愛いサーヴァントがいなくてことくらいだった。一応、念のために右手に令呪が浮かんでないか確認したが、もちろんそんなもの浮かんでいるはずもなく。

うーん、残念。

とりあえず、このままこの部屋でじっとしてても埒が明かないか。誘拐されてしまった以上、そんな都合よく逃げ出せるとは思えないけど、行動しなければ何も始まらない。まずは外に出てみるか。

ドアにカギがかかっていないことを祈りつつ、オレはベッドから出ようとしたんだが、

ガチャッ

まるでタイミングを見計らったようにドアが開き、入ってきた女の子と目が合ってしまった。

「……………」

目が合ったというのに互いに無言。

入ってきたのは、オレのことを「兄上様」とか呼んで抱きついてきたあの子であった。

何というかバツが悪い。ものすごく悪い。

穴があったら入りたかった。

そういうわけで、目が合ったという事実はなかったことにして、ベッドに潜り込むことにしたオレだったんだが、

「……あ、兄上様、兄上様あ！」

女の子がいきなり飛び付くように抱きついてきたもんだから、そんな暇さえなかった次第。よく抱きついてくる娘さんだ。役得役得。「本当に、本当に心配したんですよ。三日も眠り続けて、このまま目を覚まさなければ、私ももう死んでしまおうかとさえ……」

わんわん泣きながら、女の子はオレの胸元でしゃくり上げる。

オレはこの子の兄でも何でもないんだが、ちよつと罪悪感。

まったくこんな可愛い妹を泣かせるなんて、とんでもない兄貴だぜ。

女の子の馬鹿兄貴への怒りが湧き上がるのを押し殺しつつ、それから数分の間、彼女の感触を堪能させてもらった。

で、女の子が落ち着きを取り戻したのを見計らって、オレはたずねることに。

「あー、きみは何やらオレを自分のお兄さんと勘違いしているようだね。

よく見てごらん。きみのお兄さんはこんなにイケメンだったかい？」

他人の空似ってのもあるかもしれないが、オレは日本人でこの子は西洋人。

ってことは兄貴も西洋人だろうから、どう頑張っても兄貴とオレ

を見間違えるのは考えにくいんだけどさ。

「兄上様、まさか儀式の反動でまだ記憶が混乱なさっているの？」

「いやいや、混乱しているのはきみの頭だろ？」

いい機会だから鏡で確認してみなよ」

きみとオレとでは顔の造りからして違うからさ。

鏡を見てもまだ自分のことをオレの妹と言えるなら、そのときは特別に妹認定してやらないでもないけど。

「そうですね。どうやら、兄上様は本当に記憶が混乱しているようです。ですが、これを見てもまだ自分がウェイン・カルシュタッドではないと言えますか？」

言うなり、自分の手をこちらに向けて伸ばしてくる女の子。

一体何をする気だ？

嫌な予感がして思わず身構えるオレだったんだが、

次の瞬間、

『Я Ψ Ъ』

彼女が何かつぶやいたかと思うと、女の子の伸ばした手の先に水滴らしきものが集まり始め、ほんの数秒でそれが直径三十センチほどの水鏡となったのだった。

酔狂ではなく水郷でもない、水の水鏡の『水鏡』である。
で、

「……………」

オレはといえば絶句。絶句以外にない。絶句するしかないだろう。まだ寝ぼけているんだろうかと思い、眉毛を引っ張ってみたが痛い。

夢じゃない。眉毛が抜ける前に引っ張るのをやめる。

「えっと、何それ？ 魔法？」

いやいや、実はこの子は稀代のマジシャンでしたーってオチがあるかもしれない。

などと期待を込めて質問したもの、

「兄上さまだって、このくらい簡単でしょう？」

きょとんとした顔で女の子は言ったのだった。

もうこの表情だけで確信できたね。

この子、マジもんの魔法使いだよ。

っていうか、オレにも簡単にできるなんて、ほざいてくれちゃってるけど、

いやいや、絶対無理だから。

首を振るオレだったが、女の子が不思議そうな顔——まるでこんなことできて当然みたいな顔でこちらを見てくるので、

ためしに女の子のつぶやいた呪文を真似てみることにした（本当はこんなことをしている場合じゃないんだが、なんか色々と立て続けに起きまくってて思考力がマヒしちまったらしい）。

そういうわけで、

『ЯΨЫ!!!!!!』

気合いを込めて言ってみたオレ。

まあ、意気込みだけは良かったんだが、

一秒、二秒……十秒経っても変化なし。

駄目だ。水滴が集まる気配すらねえよ。

女の子はといえば、信じられないものを見るような目でこちらを見ている。

どっちかというオレの方が信じられない経験をしてるんだが？

「……お、お気になさらないで、兄上様はまだ病み上がりで本調子ではないのですわ。

体調が良ければ、これの十倍はある水鏡を一瞬で作れるはずですよ」

本人はフォローしているつもりなんだろうけど、それってフォローになってないぜ。

その水鏡の十倍って、きみの本当の兄貴はどんだけ化け物なんですか!？

ちよっとした方向違いの挫折感に打ちひしがれつつ、

「これできみもわかっただろ。オレはきみの兄貴なんかじゃないん

だ。何できみがオレを兄貴と勘違いしているのかは知らないが、人違いだから他を当たって――」

と、言いかけたオレを遮るように、女の子はずいっと水鏡をこちらに近付けたのだった。

何のつもりだ？

首をかしげつつも、差し出されるままに思わず覗いてしまったその鏡には、

「誰だ、こいつ？」

本来、映っているはずのオレの顔の代わりに、見知らぬ西洋人のイケメンが映っていた。

「あー、待て待て、どういうことだこれは？」

ぺたぺたと顔を触ってみる。

それに合わせて鏡に映った西洋人の顔を触っている手も動いていく。

試しに、にっこり笑ってみると、鏡の中のそいつもにっこり笑い返してくれた。

うわー、この顔で笑いかけたら、ほとんどの女は落ちるだろうなーってくらい爽やかな笑顔だよ。てめえは『きみに届け』の風早か？きりっとしてみると鏡の中のそいつも、きりっと凛々しい表情を浮かべ、間抜けっぽくへらへら笑うと、鏡の中のそいつもへらへらしたものの、全然間抜けっぽく見えなかった。

というか待ってくれ。

オレ、いつの間にか見知らぬ外人になってるんだが？

これって絶対に整形とかじゃねえよな。

「どうですか、兄上様、何か思い出しましたか？」

オレがあまりの事態に混乱してしまい、自分の顔を引っ張ったりしている、痛まじげな表情で女の子がたずねてきた。

兄貴の顔した人間がこんな奇行をやってりゃ、そんな表情にもなるよな。

さて、どうしたものか。

十秒ほど、思考をフル回転させ、

「実はオレはきみの兄貴じゃないんだ」

色々と考えたものの、包み隠さず本当のことを言うことにした。

女の子はといえば、ふたたびきよとした顔。

うーん、いきなりこんなことを言われても混乱するだけだよな。

オレがどうやって説明するか考えていると、

「……兄上様、確かに私たちは血の繋がっていない兄妹ですが、私は貴方のことをずっと兄としてお慕いしてきました。

しかし、それが迷惑だったというのなら、そんな回りくどい言い方をせずに、このシャルロットにはつきりと言ってくださいまし！」

目じりに涙を溜めて、女の子、もといシャルロットは詰め寄ってきたのだった。

なんかものすごく勘違いしてらっしゃる！？

っていうか、血が繋がらない妹っていうことは義妹かよ。

羨ましいぞ兄貴！

なんて羨ましがってる場合じゃねえだろうが、馬鹿かオレは。

「えっと、シャルロット、でいいんだっけ？」

別にオレはきみのことを迷惑だなんて思っていないし、多分、きみの本当の兄貴も迷惑だなんて思っていないだろう。

もしもそんなこと思ってたなら、オレがぶっ飛ばしてやるから安心するんだ」

って何を格好付けてるんだ、オレの阿呆。

「いやいや、オレが言いたいことはそうじゃなくて。

本題に入ろう。

オレはきみの兄貴と同じ顔をしているが、実のところ中身は全く違う人間なんだ。

どういうわけか事故に遭って死んじゃうわ、なんか変なのと契約しちまうわで、こんな姿になってるんだが、オレはきみの兄貴じゃない。

これだけは本当のことだ。信じてくれ」

こんな可愛い子が義妹だなんて最高だぜ、と思う気持ちがないでもないけど、嘘をつくわけにもいかない。

何かあったら、この子の本当の義兄、ウェインだったか、にも申し訳が立たん。

「では、貴方はいったい何者だということですか？」

どうやらシャルロットも、いつもと様子が違う義兄によく違和感を持ってくれたらしく、真っ直ぐな瞳でたずねてくる。

よしよし、脱線していた会話が本筋に戻ってきたぞ。

ここでオレが何者かを話せば、シャルロットも納得してくれるはず。

そう、そのはずだったんだが、

しかし、

「オレは――」

自分の名前を言おうとして、

「誰だったけ？」

思い出せないオレがいたせいで、結局失敗したのだった。

「ほら、やっぱり儀式の影響で記憶が混乱しているだけなんですわ」「いやいや、だから本当にオレはきみの兄貴じゃないんだって」

「兄上様、儀式に失敗したのがショックだからといって、そのように自分を誤魔化しては魔術の名門カルシュタッド家の嫡男の名が廃りますわよ」

名が廃るも何も、オレは最初からカルシュタッドなんざ知らねえっての。

うーん、このままじゃ堂々巡りもいいところだな。

不本意だが、ここはオレがウェインって野郎だってことにして、自分の置かれている状況を把握するほうが先決か。

下手なことを口走って藪蛇だけは勘弁だからな。

「あー、まだ記憶が混乱しているんだが、とりあえずきみの言うとおりオレがウェインってことで話を進めよう」

「なんだか言い方が気になりますわね。」

どうして兄上様は私のことをいつものようにシャルロットと呼ぶず、きみなどと他人行儀な呼び方を為されるのです？

どうぞ、いつものようにお呼びくださいませし」

こっちを見ながら、少しだけ頬を膨らませているシャルロット。

いやはや、とんでもねえブラコン娘だな。

こんなに義妹に好かれるなんて、ウェインって野郎が憎らしくなってきたぜ。

まあ、さすがにだからと言って、自分を殴るわけにもいかないんだが。

「それじゃあ、シャルロット、質問その一。ここってどこ？」

「兄上様の自室ですわ」

「いや、そうじゃなくて、この世界の名前とか国の名前とか地域の名前とか」

「……白獅王大陸のトマニア王国カルシュタッド東候領レミリアですが」

心配げな顔でこちらに視線を送ってくるシャルロット。

まさか慕っている義兄が、マジで自分の住んでいる地域の名前さえ忘れてしまうほどのダメージを脳に受けてしまったとしたら確かに心配だろう。

いや、実際のオレは最初から地名なんて知ったこっちゃないんだけどさ。

しかし白獅王大陸にトマニア王国、おまけがカルシュタッド東候領か。

オレは今、ウェイン・カルシュタッドって奴になっているらしいが。

「実はウェイン・カルシュタッドって、やんごとなき家柄の人間だったり？」

今さらな質問だった。こんな立派な部屋に住んでる人間が平民なはずもない。

シャルロットの着ている服も中世の貴族っぽいし。オレの着させられている寝巻の素材もよく見れば、なんか高級感漂っていた。

「……兄上様、もはやそこまで記憶に混乱が？」

ご自身がトマニア王国四大侯爵家筆頭カルシュタットの御嫡男であることさえ、忘れてしまわれたのですか？」

シャルロットは顔を押しえて泣き出す始末だった。

うわー、泣くな泣くな。

オレは何も悪いことしてないのに何だろうね、この罪悪感。

あと色々と説明的な台詞をありがとう。

「えっと、ごめん。その儀式……に失敗したせいで、まだ記憶が混乱してるんだ」

なんだかシャルロットが儀式のせいで、ウェイがなんたらかんなら言ってた気がするので、適当にごまかすことにしたオレ。我ながら、せこいと思うが背に腹は代えられん。

「い、いえ、私の方こそ取り乱したりしてすみません。」

兄上様ほどの天才術者がレーヴァテインの儀に失敗してしまったんですもの、反動で記憶に混乱が出て仕方ありませんわね」

一人納得した感じのシャルロット。

「いや、オレとしてはそのレーヴァテインの儀式ってのが、何なのかわりたいんだが？」

「まさか、それすらもお忘れになったのですか!？」

「えっと……面目ない」

「い、いえ。兄上様、謝らないでくださいまし。」

かいつまんで説明するとカルシュタットの嫡男は十七歳になると一族に伝わる神剣『レーヴァテイン』に自分の魔力を注ぎ込み、己の力を周りに示す儀式を行うんです」

「己の力を示す儀式？」

ずいぶんと曖昧な表現だった。

まあ、ここが魔法の世界ってのはわかったから、その『レーヴァ

テイン』も大層な剣なんだろうけど。アーサー王伝説のカリバーンみたいなもんか。

「もともと『レーヴァテイン』はトマニア建国時に初代カルシュタッド当主が愛用していた武器で、生半可な人間が扱おうとすると暴走してしまうほど、危険な神器なんです。

ですから『レーヴァテイン』に認められるということは、人よりすぐれた魔力を持ち、カルシュタッドの後継者であることを示す何よりの証左になるんです」

ふーむ、とうなずいてみたものの、オレはシャルロットが言っていることの半分も理解できていなかった。

とどのつまり『この剣を鞘から抜くことができる者こそ真の勇者なのだ』みたいな感じでいいんだよな。

で、ウェインって奴は情けなくも儀式に失敗しちゃったと。

なんだ、簡単な話じゃないか。

そう納得しかけたオレだったんだが、何かが引つかかった。

シャルロットはウェインのことを天才術者とか言ってたよな。

いくらブラコンとはいえ、才能のない奴をそこまで持ち上げないだろうし、それこそあの言い方だとウェインなら成功して当然みたいな口調だった。

「なあ、シャルロット。どうしてオレはそのレーヴァテインの儀式に失敗したんだろう？」

オレは極力シャルロットを刺激しないよう慎重に問いかけた。

おそらくオレがこの世界にいる原因も、そのレーヴァテインの儀式ってやつが失敗したことによるものなんだろう。

そして、あの暗闇の中でオレのことを呼んでいたあの赤い剣が、そのレーヴァテインなのはまず間違いない。

だとすればオレがウェインって奴の中に入っちゃったのも、すべてレーヴァテインが発端になっているに違いないのだ。

まだ上手くは説明できないが、儀式の失敗により本物のウェインに何かが起こって、代わりにオレがウェインの身体の中にいる状態

と考えていいはずだ。

「一体オレは儀式のときに何をやらかしたんだ？」

これまでのシャルロットの話だと、儀式自体は儀礼的な物でそこまで危険なものではないような印象を受けた。

ならば、天才術者だっていうウェインはなぜ失敗したのか？

奴はきつと特別なことをしたに違いない。

そして、そこに謎を解くカギがあるはず。

「なあ、シャルロット、答えてく……」

詰め寄るように言いかけたオレだったが、

「くそっ、急に身体が……」

初めてこの世界で目覚めたあのときと同じ虚脱感が急に全身を襲ってきて、最後まで口にすることができなかった。

「あ、兄上様、大丈夫ですか、兄上様！？」

心配そうに呼びかけるシャルロットの声が聞こえたが、返事を返してやる余裕すらない。

睡魔に抵抗することすらできず、

すべてが中途半端なまま、オレの意識はふたたび闇の中へと落ちて行った。

そうして気を失ってから、どれほどの時間が経ったのだろうか。

『――主よ、我が主。目覚めよ』

声が聞こえてきて、オレは中途半端に目を覚ました。

「何だよ、うっせーな。もう少し寝かせてくれよ」

せっかく人が気持ちよく寝ているのに、それを邪魔しようとは性格の悪い奴。

そんな奴のために起きてやる義理はないので、無視して寝続けようとしたんだが、

『起きているのに、そういう態度を取るといふのなら仕方がない。

力づくというのは不本意だが――』

む、何やら嫌な予感。

寝ぼけ眼のまま、とつさに逃げようとしたオレだったが、遅かった。

いきなり右腕を掴まれたかと思うと、抵抗する間もなく、「ちよつ、待って——ぎやあああああああ」

腕十字ひしぎを極められていた次第。

「——ギブギブ、ギブアップ。起きました。起きましたから助けて、マジで折れる。折れちゃうから！」

『む、ようやく起きてくれたか。では眠気覚ましにもう少し続けるぞ』

「ちよつと待て！ ではって何だよ！？ マジでマジで、マジで勘弁！」

『仕方がない。主がそう言うのなら今回はこれくらいにしておこう』残念そうに声の主はつぶやくと、ようやくオレを解放してくれた。くそつ、どうしてオレがこんな目に。

「きみなあ！ 寝ている人間に腕十字ひしぎをかけるなんて、どういう神経をしてるんだ！？」

『妾を無視して、寝続けようとする主が悪い』
悪びれる様子もなく言いやがったよ。

「……いや、だからって、年頃の女の子が腕十字ひしぎってのは行儀が悪いんじゃないかっていうか」

ここでようやくオレは大事なことに気付いた。
どうして、こんな重大なことに気が回らなかったのか。

寝起きのせいで頭が回ってなかったし、いきなり腕十字ひしぎを喰らって混乱していたせいもあるんだが、それにしても我ながらどうかしていた。

目の前に見知らぬ少女が立っているというのに、何の違和感も持たないなんて。

あなた、一体だれですか？

少女の年齢はおそらく十五、六。

月明かりに映える赤い髪に、印象的な深紅の瞳がこちらを見つめ

ていた。

そう。一目でわかるほどに際立った存在。

この子は絶対に普通じゃない。

「一体きみは何者だ？」

さつきからオレのことを当然のように主とか呼んでるが、きみみたいな暴力少女と主従関係を結んだ覚えはないぞ。

『主、何を寝ぼけたことを言っている？』

あんなに強く掴んだのに妾のことを忘れたのか？』

掴んだ？

それは――人に対して使うには異質な表現なはずなのに、目の前の少女に対しては何故か違和感がなかった。

彼女を彩る、どこかで見たような赤い髪に深紅の瞳。

そう、それはまるで、あの赤い剣……

『どうやら思い出したようだな。』

そう。妾が神剣レーヴァテインだ』

言って、少女――レーヴァテインはくすりと口元を吊り上げたのだった。

ウェイン・カルシュタッド（後書き）

作者も鯛焼きはクリームが一番好きです。
だからといって、あんな風に死ぬのはごめんですが。

"レーヴァテイン";

突然だが、ここまでの状況をおさらいしてみようかと思う。

交通事故で死んじまったオレは何の間違いか、魔法世界のウェイン・カルシュタッドって奴の中に入っちゃった。

で、そのウェインって奴は天才術者でカルシュタッド家の跡取りだったんだが、その資質を示すレーヴァテインの儀式ってのに失敗したそうで、

オレがこの身体になったのも、おそらくその失敗が原因とのことだった。

まあ、信じられないような体験ばかりで色々と端折ったところもあるが、大まかに言えばこんなところ。

そして今、オレの目の前にはすべての鍵を握る神剣『レーヴァテイン』が、なぜか女の子の姿で立っているという状態なのだった。

『主よ、その様子だと身体の具合はもう良さそうだな。

目の前で倒れられたときは、さすがの妾も肝が冷えたぞ』

見た目は少女なのに、なんだかババくさいレーヴァテインの口調。さて、一体オレはどこから突っ込めばいいんだろう？

「えっと、この世界だと武器は人間になれるのかい？」

他にも色々と突っ込みどころ満載なんだが、とりあえず一番気になったところから。

この状況でもパニックにならないオレってば、さすがだぜ。我ながら自分の順応性の高さが嫌になってくるけど。

『妾を人間ごときと一緒にするとは、主の目は節穴か？』

オレの質問のどこが気に入らないのか、不機嫌さ爆発の険しい目つきでこちらを睨みつけてくるレーヴァテイン。

なまじ綺麗な顔をしているせいで、かなりの凄味がある。

っていうか、人のことを主呼ばわりしているわりに全然敬う気ね

えのなコイツ。

『どうやら主は勘違いしているようだが、妾は神剣レーヴァテインに宿る精霊であり、またレーヴァテインそのものでもある。

神人たちの奴隷であった下等な人間ごときと一緒にされてもらっては困るな』

腕を組み、不愉快だと言わんばかりのレーヴァテイン。

はいはい、精霊ですか。人間扱いしてすみませんでした。

いきなり精霊とか言われても、オレはもう驚かなかった。

こうして訳のわからない魔法の世界に飛ばされたあげく、見ず知らずの男の身体の中にいる以上、この程度のことで驚いていたら身体が持たねえって。

「オーケイ、オーケイ、きみを下等な人間ごときと一緒にして悪かった」

『なに、わかればよい』

「ところでひとつ教えてほしいんだが、この世界にオレを連れてきたのはきみか？」

『わかっていくせに今さら確認とは主も人が悪いな。

察しのとおり、主をこの世界、いや、その身体に憑依させたのは妾だ』

身構えていたこっちが拍子抜けするほど、あっさりと認めるレーヴァテイン。

偉そうな態度を取っているが、実はそこまで悪い子じゃないのかもしれない。

多分、ただのアホの子だ。

「えーっと、何でそんなことを？」

ここからが核心である。

オレは相手がアホの子とはいえ、慎重にたずねた。

『何故と言われてもな。』

妾も目覚めたばかりで状況がよくわかっておらんのだが。

とりあえず主が憑依しているその身体の本来の持ち主が、妾に干

渉してきたのが一番の原因と言っておこう』

「干渉？」

シャルロットの言ってた『レーヴァテインの儀式』ってやつのか。
とか。

確かレーヴァテインに魔力を注ぎ込んで、自分の力を示すのが目的らしいが。

「でも、それって前々から行われてた儀式なんだろう？」

なのに何で今回だけウェインって奴は失敗したんだよ？」

『あやつの魔力は他の人間に比べ、あまりに突出しすぎていたのだ』
オレの質問に対し、淡々と答えるレーヴァテイン。

「うーん、シャルロットがウェインのことを天才とか言ってたな。
「つまり、ウェインって奴の力が強すぎて、レーヴァテイン——き
みが暴走したってことで良いのか？」

だとしても何でオレがこの身体に憑依させられることになったのか、
ちょっとよくわからんのだが。

『いや、それも少し違う。本来なら、人間は妾の表層の力しか扱え
ぬはずなのだ。

妾の本来の力は「神人」にしか扱えぬように封印されておるから
な。

これまでも何人かの人間が妾に干渉してきたようだが、封印され
ていた妾を目覚めさせるほどの力の持ち主はおらんかった。

しかしウェイン——あやつだけは違った。

こともあるうちに、人間の分際で幾重にも張り巡らされた封印の存
在を見破り、あまつさえ神人が施した封印を破って妾に直接干渉し
てきたのだ』

語るレーヴァテインの声音には苦々しげなものとともに、わずかな
がらだが感嘆の響きも混ざっていた。

封印を破ったというウェインに対する感情は非常に屈折したもの
があるようだ。

しかし、それにしても『神人』ねえ。

そういえばさつきも『神人』って言葉が出てきたけど、この世界には人間以外にも他の人種がいるらしい。

まあ、魔法のある世界なんだから、それもまた当然なんだろうけど。

女の子のエルフとかいたら、是非ともお近付きになりたいものである。

ただレーヴァテインの口調からすると、この世界では『神人』は人間よりもかなり上位の存在らしいが、

だとすれば、ウェインはそのすごい『神人』の封印を破っちゃうくらいの天才だったことになるな。

マジで何者だよ、ウェイン・カルシュタッド。

『しかし封印を破ったあやつも無傷では済まなかった。

封印が解けた際の衝撃で魂が傷付き、肉体から剥離してしまったのだ』

「肉体から剥離？」

先ほどの様子から見て、封印を無理やり解かれて怒っているかと思っていたのだが、レーヴァテインは意外にも残念そうな顔をしていた。

『主も魂が肉体から離れると人間が死んでしまうのは知っておるな？』

いや、さも当然みたいな顔して言われてもね。

つい先日まで普通の学生生活を送ってたオレは、そんなスピリチュアルな思想、考えたことすらありませんでしたよ。

『まあ、とにかく本当なら奴のことなど放っておいても良かったのだが、妾の封印を解くほどの術者をみすみす死なせるのも勿体ない話だからな。

とりあえず、魂が離れてしまった奴の肉体が死んでしまわぬように、次元の狭間を漂っていた仮の魂を入れることにしたのだ』

あっけらかんと核心を言っただけ、レーヴァテインはオレを見た。なるほど、つまりオレがここにいるのはそういうわけね。

「で、その肝心のウェインの魂は今どこにあるんだ？
それで、もしウェインの魂が戻ってきたとしたら、オレはどうなる？」

まあ、色々引つかかるところもあるんだが、それは置いて、
オレはレーヴァテインに最も重要な懸案事項をたずねることにした。

この身体がウェインの物である以上、オレが乗っ取り続けるわけにもいかないし、

もしそれでウェインの魂が戻ってきたとしたら、死人の身である
オレはいったいどうなってしまうのか？

さあ、包み隠さず教えてもらおうか、と詰め寄りかけたオレだったんだが、

『む、すまん。そろそろ限界のようだ』

「限界？」

『この姿で人前に現れるのは、なかなか力を消耗するのぞな。』

そういうわけで妾はひとまず消える。

しかし心配しなくてもよいぞ。

どんなに離れていようと妾と主は繋がっておるからな』

「ちよっと待て、だったら消える前にオレの質問に答えろ！」

オレの死活問題が関わってるのに、ここでおあずけプレイなんて勘弁してくれ！

『さもありなん。主よ。さらばだ。また会おう』

オレの懇願もむなしく、レーヴァテインは爽やかな笑みを浮かべると目の前から霧のように消えたのだった。

おい、何の冗談だよ。マジで、

「ふ、ふざけんなあああああああ！」

夜の闇に絶叫がこだました。

その後、レーヴァテインを探そうとしたオレだったが、部屋から出る段階でつまずいてしまい、それどころではなくなってしまった。だってさあ、魔法の力か知らないけどドアを押そうが引こうが、

うんともすんともピクリとも動かないんだぜ？

仕方なく窓から出ようとしたはいいものの、嵌め殺しの窓ガラスが大統領専用車の超強化防弾ガラス並みに硬くて、それも断念するしかなかったオレ。

くっそー、こんなところに閉じ込めやがって、もしもトイレに行きたくなったらどうするんだよ！？ 出せよ、出しやがれえええ！ひとしきり暴れたり叫んだりしたものの、どこからも反応はなかった。

どうやらこの世界の魔法は強化だけでなく防音効果まで完璧らしい。

ならば最後の手段だ、と助走をつけてドアへのダイビングキックを敢行したものの、やはり何の効果もなく終わったところで、オレは部屋を脱出することを諦めた。

さすがに一時間近く暴れまわったせいで体力が限界を迎えたのだ。「くっそー、こんなことならレーヴァテインがいるうちにこの部屋を出とけば良かったぜ」

一見、難攻不落にも思えるこのドアも、あの娘が協力してくれれば簡単にぶち破れたかもしれないし。

っていうか、あれだけ偉そうにしてたんだ。

それくらいやってもらわなければ神剣の名が廃るってもんだぜ。

「ああ、オレの人生はこんな異世界のわけのわからん部屋に閉じ込められて終わるのか」

絶望とともにつぶやきつつ、

「まあ、疲れたし寝るか」

オレは寝ることにした。

あの絶望的な無明荒野から脱出できたんだから、今回も何とかなるだろう。

我ながら楽観的な気がしないでもないが、よく言うだろ？

明日は明日の風が吹くってさ。

"レヴァテイン" (後書き)

自分もスピリチュアル的なことはあまり信じていません。
のっけから説明くさい話ばかりですみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8243w/>

白獅王戦記譚

2011年9月20日03時20分発行